

十腰内 I 式土器に伴う垂飾品について

本調査では、B地区より縄文時代後期前葉の十腰内 I 式土器期に帰属できる垂飾品が3点出土した（第12図3～5）。ここでは、この垂飾品について装飾部位の推定や分布、製作時期を中心に考察する。

①名称について

今回、土製品に分類した中で、本資料だけが形態や製作方法から付される名称ではなく、用途から称したのは、墓と想定した土坑より孔を有する土製品が3点一括で出土し、これを遺体に装着された一つのセットとして考え、この3点を総称して「垂飾品」とした。さらにこれらを単品として捉えた場合には、それぞれが「土版」という名称が与えられ、その形状から菱形を呈するもの（第12図3）は、「方形土版」、橢円形を呈するもの（第12図4、5）は、「円形土版」として分類される（註1）。検討にあたっては、前記の方形土版をさらに細分し、次に以下の定義を設定し、この定義に属されるものを今回の対象とした。

「形状は、概して方形あるいは菱形を呈し、側縁の短軸または長軸の方向に貫通孔を有するものである。文様は、主に沈線文や刺突文などで構成される。」

②機能および用途

第2号土坑の底面に接する層位から、平面形が菱形を呈するものが1点、橢円形を呈するものが2点出土した。本土坑は墓として考えられ、その認定方法（註2）にあたっては、土坑の大きさ・平面・断面形などからみた遺体の埋葬の妥当性や、土坑中の埋土が攪乱状態の单層（註3）であるという必要条件を満たし、また遺物（本資料）の出土状態から土坑墓として判断した。本資料は、死者が装着していたもの、あるいは死後遺体に装着されたものと考えられる。出土位置は、土坑の中央から東寄りに3点が少し離れて出土した。（第12図）。その位置から装着部位を推定すると胸あるいは腹に垂れ下げられたものと思われる。

③資料の分布

ここでは、上記の方形土版が東北北部から北海道南部にかけての遺跡からの出土例が認められることから、その分布について検討する。

管見によれば上記の定義に属される資料は、

青森市桜峯（1）遺跡（本遺跡）から1点

青森市四ツ石遺跡から2点（註4）

弘前市十腰内遺跡から1点（註5）

八戸市丹後谷地遺跡から1点（註6）

秋田県鹿角市大湯環状列から2点（註7・8）

北海道函館市石倉貝塚から1点（註9）の6遺跡8点を数える。

以上の遺跡の分布を見てみると、その範囲は十腰内式土器様式（註10）の分布圏（註11）内にとどまり、遺跡数は少ないものの、青森湾周辺域、岩木川流域、馬淵川流域、秋田県米代川流域、北海道渡島半島域に分布している。

④製作時期

各遺跡で出土した本資料は、共伴する土器から縄文時代後期前葉、土器型式でいえば十腰内 I B 式土器（註12）期に製作された可能性が考えられる。

桜峯（1）遺跡では、縄文時代前期末葉～中期初頭の円筒下層 d₂式～円筒上層 a 式土器を主体としてい

るが、後期の土器では、十腰内 I B～十腰内 II式を中心としている。本資料の出土地点であるB地区では、後期の土器が主体的で、十腰内 I B式が主に出土している。

四ツ石遺跡では、少ない面積の調査区から十腰内IB式を主体とする土器と共に出土し、丹後谷地遺跡でも、捨て場2と称される遺物が集中するブロックから出土しており、このブロックの中には十腰内 I B式土器を中心に含まれていた。

大湯環状列石においても、大湯II式（註13）と称され十腰内 I B式土器に比定される土器を主体とする調査区から出土している。また、十腰内遺跡や石倉貝塚でも、十腰内 I B式土器が出土している。

以上のような出土例からみて、十腰内 I B式土器期に製作された可能性が高いという帰結を導き出した。

（児玉 大成）

註1 本資料の分類にあたっては、成田滋彦1996「後期土版考」『研究紀要』1青森県埋蔵文化調査センターによった。

註2 岡村道雄 1993「埋葬にかかわる遺物の出土状態からみた縄文時代の墓葬礼」『論苑考古学』天山舎

註3 「第III章第2節」の事実記載では8層に分層したが、それぞれがブロックとして捉えることができ、一度に埋め戻された状況を呈している。

註4 青森市教育委員会 1965『四ツ石遺跡調査概報』

註5 今井富士雄・磯崎正彦 1968「十腰内遺跡」『岩木山』

註6 八戸市教育委員会 1986 「丹後谷地遺跡」

註7 鹿角市教育委員会 1993『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（9）』

註8 鹿角市教育委員会 1996『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（12）』

註9 函館市教育委員会 佐藤智雄氏のご教示による。資料を実際に見せていただいた。

註10 成田滋彦 1989「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観』4小学館

註11 註10の分布図を参照した。

註12 註10と同じ

註13 秋元信夫 1986 「大湯環状列石周辺遺跡出土土器の変遷」『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（2）』鹿角市教育委員会